

主催者側挨拶(東京大会「世界のなかの沖縄」)

KIYONARI, Tadao / 清成, 忠男

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

25

(開始ページ / Start Page)

117

(終了ページ / End Page)

119

(発行年 / Year)

1999-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00015847>

《主催者側挨拶》

法政大学総長 清 成 忠 男

法政大学は数多くの付属の研究所をもっています。大原社会問題研究所をはじめとしまして、能楽研究所であるとか、日本に一つしかないユニークな研究所をもっています。きょうの主催の沖縄文化研究所も、沖縄文化を研究するという特別な研究所としてはたぶん本土に一つだろうと思っています。

この研究所は一九七二年、復帰の年にできていまして、その設立十周年ということで、八二年に国際シンポジウムを開いています。きょうはそれに続いて、この研究所としましては第二回目の国際シンポジウムですが、タイミングが非常によかったのではないかと思っております。

ご承知のように、沖縄というのはたいへん重要かつ複雑で、なかなか解決の難しい基地問題を抱えている。しかも、その振興ということが問題になるわけですが、アジアおよび世界とのかかわりがなければ振興が考えられないということだろうと思えます。

私自身も、開発庁の第一次振興開発計画を批判しておりましたら、第二次振興開発計画策定の際には計画の策定に加われということで、二次振計、三次振計、三次振計後期見直しというのをずっとや

ってきたわけですが、三次振計になってきますと、やはり国際関係を抜きにしては振興開発計画そのものが議論できないという状況になっていた。そういう意味で、今回のシンポジウムは非常にタイムリーだったと思っっているわけです。

今回は「アジアのなかの琉球・世界のなかの沖縄」ということであります。沖縄大会は一昨日開いたわけですが、アジアのなかの琉球ということで、近世琉球王国が主題でありました。そして近代沖縄を飛び越して、きょうは「世界のなかの沖縄」ということであります。

沖縄大会の主要な論点というのは、結局のところ、近世琉球王国の主体性を検討するということに尽きたように思います。その意味では成功であったと思うわけですけれども、こうした近世の琉球王国の主体性を論ずる場合に、その王国の性格であるとか、構造が問題になってきました。その性格というのが、たぶん本土であるとか、あるいは西ヨーロッパの封建制とは違うであろう。それは段階的に遅れているというよりは、類型的に違うのではないか。その意味では、東アジアとの共通性ということが強調されてもいいのではないかと感じたわけです。

それからまた、こうした琉球王国の主体性を支える経済力ということも沖縄大会では議論の対象になりました。こうした経済力を評価するときに、交易、とくに遠隔地商業といえますか、それが非常に広がったわけですが、それ自体が琉球王国の発展を示すというよりは、私を感じましたのは、琉球王国内部の経済構造とどう遠隔商業が連関するか、そういう論点を残してくれたのではないかと

思いました。

東京大会は、こうした近世の琉球から近代沖縄を超えて、一足飛びに世界のなかの沖縄を議論するわけですけれども、やはりきょうも現代沖縄の主体性が論じられるのではないかと期待しています。きょうの議論が活発化することを期待しまして、ごあいさつとさせていただきました。きょうはどうもありがとうございました。